續草庵集蒙求諺解四　雜

續草庵和歌集蒙求諺解巻第四

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

雜

民戸は家をて曉鶏を

[illegible]

明しはつ戸をさしてこそ鳥をまちて明るをもなかれ。さねかねは月よ明る事を告くは何の詮をもなき事也といひて浮世をいへる也

同しこゝろを

よ所のこれ籬をよ菊をあつめて涙をそゝるのあはれをそへける竜をわれ見は籬をよそにいふ事もなかりしにいつれをとよまる。暁方。夜の明る何か。籬をすゝにより。身の哀る事をかへりてはもしく何らか小柳の出くるくあるを同しゆうにかくを急よ音に涙をそゝるてふ

賜たる民家にて　浦松

煙らぶかたらもあるかど煙やかね。あふれらの松の心くお松の烟もそ。松のかくらの煙さうは何とるかく烟の女うたうきれ立神之行の烟。あわかのけゝるかと。皆同し。あかつ浦

煙を庭れゆく章のひかれけるまゝてて煙せく烟く立なしふ事れなんれ也。たゞはさん也。ひかれ松すて外ふなしぶ木乃あきれくら。烟さへ立なしとあるゝまより

九月十三夜松軍家三首　庭松

新ちうされてきたまもれ海の風あかけさ松程とあり又四方の海は四海の事也　四方れ海風あつらかれ波のかくまくゆのありさ世の月をみるかる　四方乃海も烟ふぎりふ濱びさしひさきしきちよ君ぞとらん　拾遺　上

四方の海をひかれけして浪かさん時しや我方徳か歌へとまま　後成　新道を。君の風のひかれの静なりけれて。四海乃おんつなる程をあるを也。天下の地の四方は皆海なり。四海といへと。天下をさしていふ事也。尊為天子富有四海之内　中庸　此七者修則四海之内無刑民　大戴礼主言篇　四海

安危照掌内百王理乱懸心中白氏朗詠帝王　張華博物志云。
天地四方皆海水相通。地在其中蓋無幾也。七戎六
蠻。九夷。八狄。形類不同總而言之謂一四海言皆近
於海宣按こゝろに先人。四書頭書より出たり。考事文類
聚及博物志大同少異也略之

夕月荻　能宣田

夕月荻能宣ゆふつくよおぎ
風波深恨みつゝとしあまを
ふ　古雅上　あまを衣きてのしほたれぬれやとゝ
とたゞ五音相通也。たかうなる花なりの類也。衣のしほたれぬれ上
こゝろもゝ紙まれて。衣のしほたれぬる類
なり夕月夜のやうに。夕月夜もしほたれぬれ
ぬれぬれなくあしきなり

古集文言類百首より　流水浸雲根を
圓機活法。地理門。流水下云。好花生所謂
水浸雲根作者未考。雲い石根とゝ云る也
石を。雲根とゝ云事也。過橋分野色。移石
動雲根賈島

おぎやぎつゝ谷水ながるゝをもれ中めぐ落るきをもれ川の
風雅信州也。ぎつゝ谷の水。中より。末方の
山川乃義てなり形くゝ面白うなり
長河如帯ゝとゝ
事文類聚云。黄河去泰山二百里。祠所望黄
河如帯。漢官儀及秦山記　使黄河如帯泰山若厲　前漢言功臣表
黄河一帯長　褚朝陽編圭律髓四十七
玉川のながれ流のりめぐりたえぬや厚ぐて井てれト帯

月の夜れいかさくつるとも行めぐりてもあんこそおも
ふ　（或本云 井手玉川と云歌也 井手に玉川と云者 玉水と
つゝも 同じ玉の井とつゝも 同所 玉川のながれ流れて
あるゆゑ名付 行めぐるゆゑ 別下の第 詠歌也 歌意は
うのまゝ 或本 或本 歌意 井手の玉川の歌也 郎の字 意也 一首ハ
井手の玉川の歌 大和物語 大和国
うぶねうちうきて人おりふるものみてぐしぼりけり 大和国
みくらうきて井ゐのしるしにきよげなる人のあるよ
つまぐもにけるとぶ出てくぢ行人をとる きさらげきさ
ぬいとはしげなるゑぬいつぶれてかぶのそふふるゑ
ちどのかれいとはしげゑ ゑれいぬ紙とぐりてそのるこ
ちゐてとらいそれいぬ女ときるちくえるにいてお
つげゑそれいゆゑこれ 行ゆゑ

井かきふゆゑはてんれうとつらいてこれをか
ふみてきたりけるをびとをとりてぐりくりきるえよいきゆして。
きゆゑるえいぬ女ゑれいゑたんりけるこれを六月なれは。
ゑれどもくりゑ男いとゑゑれよりりかくてゼ
八年いくりまりて又同じ仮よさくやまくへ行て。
井ゐのまくりにゑてあてゑれいぬよ井ちんん
ゆくりる水くじ女ゑゑあるくりいつゑ。ゑゑゑゑゑ
ゆくくすゑるゑ男ゑりるゑあやまれる
人くり 山城の井ゐれまゑにしてゑれゑかゑ
いもちくゑゑくりゑ 伊勢物語 新古今にも入 ゑれゑみ
てゑりてゑゑ人ちゑれゑ者 伊勢物語の第八段

女のまんしうやわらん
寛蘿僧都よ袖をかへして作しをかざしてとう
作し之事也
難波津の風の名の通ひてや繪嶋が磯の浦もかくれん
難波はの風の名は秋の頃也　なにはの事は名所の浦
へおもむけばなり　みかさの山のつきのかたちばかりぞみえて
きこえたり　東宮を入りてんのいぶかりしける
よみてかへしける所　しはかたのこの花は梅の花をよみたる也
あさか山のかげさへみゆる山の井のあさき心をわがおもはなくに
ふる事は聞のちてその中にいひしくぞいくはてぬ人のいぐ
めでたきことをあるゆへにそのしるされたるはまかりし事のはに
さられのみを絵にかきあらはせる事　難波はよ咲やこの花
冬こもり今を春べと咲やこの花　古今序　此詞より難
波はよみに事は事のまへにありてまづ難波はをぶれ

そらのしらぬ作りてけるにげにいたくなりん　若紫巻　是をし
古今序にいはくいつの繪也。絵の磯の浦には絵の画に
そへてよめり。詩を色の繪といひ。絵を画師の詩
といへり。和歌も同事也。和歌の風流より中ごろの
名のかよひて絵をもよくかき絵にかきたる也。磯に波れ
かくるゝ事は。絵をかくしてうつしける。風の名
をまつにおもひてかうかん風の名もうしろめたき
まうみのうた秋てしはくして吹風は名をなにはとも
つたへたり　古今春　繪嶋。淡路也。播州室の向ひ絵嶋と
いふ有。これは家嶋也。海士の家嶋とよめり。への名を略
して是しまといふ事なし

雨後眺望

淡路島もみなそをまじりてさしその浦や夜にはるゝ淡路島山

須磨の浦より。淡路は。一里の間をへて。遠き所なれ。
夜の明る千鳥は。まれてちかくきこゆる。寒き夜の物にし
かなしき也

古集五言百首ニ　蒼苔満山径

此句出所未考

蒼苔より日数もへて深山木にしげりたる苔の通路
よりはしげりたる　浅茅のうへはしげり積る潮なれや。つもりし
白露しるへのなかた（後人不知古来一）浅茅のよりはしげりたる沼
水のゆく方のあさき我身かな（古今古物）詞花也。苔の通路
御ゆかしくて思ひ入らん山深き山がくれ庭のこすゑのかなしひ
路（伏見院 拾雑中）苔の通路のくちは。山深きしげりたる水をたたれは。
まづ白はられぬとし月数もへるねまく。本経の苔路
なれはよくみるに生しひしれ。山路なるに苔の生

ふかきと苔のかなしい路といへり

新筆家三首ニ　山路雪

白雪は埋む山路の末なれ屋夕日にかゝるさねかけ橋
こゑは雪の埋める山路なれども末はあらはるに
かゝりけるて。夕日のてらす所の霞を面白く傍に
きよしさゝれをゆへり

山家

よくてまもなしとさしいひしけれも入る道は入りし山の奥に
一二句は。雨さびさたれは。埋患して。又くれは。かるまじ
きしとかしかしし。時節あれば。以後のまゝにゆるん。副で
じこのたくましく住るも也。ごらく。物に埋患ことなる事。本の意
へる也。百患の故事。又 百戦百勝不如一忍
すくし

たづかねるこい月白れをそれば老てぞつぐ侍べるなる
来老門前日月遅 朗詠 幸そげさせ間ハ日月の移
りもはやぶれて。ゆかるべ。山年い間なるゆく月つきを
ゝく侍来するゆゝしに光のまたば殊ゝ老人の侍べ
きあめ。つぐはいゝくゝ也。常の人もにぐさ山年か
ゝり。却人いつゝく侍べき所也

雪護院殿

杉風れうきを友としてすぐるゝるやゝて人ゝのゝ
下句やゝてゝ云ハ。至ゝて人ゝのゝ云詞也。ゝ
ふゝびきあるれバ。常いゝきれ風もゝ今ハ杉風
なゝして。友ゝなきゆゝゝたなゝ。書風を友ゝして。
月日ゝ侍るゝゝ也

石山寺を僧正坊ゆゝ問ゝ侍ゝを

行ゝれてゝゝぞゝゝ侍るゝ山里ゝ杉をゝゝ乃友ゝみるまぞ
ゝれをかゝもゝゝる人ゝまきんゝ砂の杉も昔ゝ友なゝか
ゝゝ 奥の風古 雑上 かゝりゝゝれゝ入ゝゝゝ侍ゝゝ別て年月を
ゝゝ。山里ゝ杉ゝ。今ハゝゝゝの友ゝゝゝゝまぞゝ
ゝゝゝ。ゝゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ馴ゝゝ友ゝゝ 杉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ小倉山
杉ゝの杉ゝ別ゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝ

冷泉宰相人ゝ

ゝ家杉 定家風 雑中 ゝ合ゝゝゝ

山里ゝ人ゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我庵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ門 古雑下 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なしけるにハ。人のとへてもやとひしに今ハ。たのむ旅人
わすられるまく。松そるへし。かれしれのないかたそ
う侍しきなり

小篠峯ね中将たつねまてし時　山家

旅人とハれぬや山里ハさはあまりもさびしからまし
都人ハ小篠原をたてていつる山里ハ常ニさびしき事
み旅人の来るハまれにすこしはびしきも通ぎれさりし
をいきしさらんはいとられぬめかしよりし松さびし
からんし。今すこしもあり侍へ。又はうれにしも。ふく
とひ侍へといふ心をよめり

入道二品親王五十首哥に

ともまつもいハしふえたえをれぬも井のかまこう身を
幸
旅人いかにとこそふみとまれ跡をのこしふて

さへよ　小野貞樹　古雜下　ことれぬをあかりてふくらんと峯のに
あれども今又小松のもいまれまりゆくいそくなは。
かくふるく。雲原く。世終るまれし宿をし。むそこの
衣めての事これし身にれたる也。今又よにハ今さあるた
なりて。何まてもやす事を。きこえていふ詞也。さいしき
事ハさいしられも。今さあるにとて。まことにもいなれ
まつかしをきこえていつり　例　今はふ住うしとそもいへくせ
ひきとり塔屋の夕くれれ空　秀能 新古雜五

一

一節にかけひの水をとりなからうき世にかゝる心ぞ
山家ゆへ。一節よ心のすむハかけひの音れさひしさ
ゆくされハ水のすまん中にいつり。心を浮世にかけど。
一こゝろまゝなり也　これもとなく世のうつらふし月
新まけくるんをなひきつるん　清正 拾三　よしとくてゝみてく宿

よるねみハまくらにかをやうつすらん　行家卿 拾玄三　一とせやも
つゆもかきねの水ハ。一とせかりにすゝみてゆくへいつもよし清
すむ水の縁也。おもしろくいつも。隣家のかけ樋ハ隣家
の方へ樋をうけつゞて。水をまけてうくる物なれバ。
かけひの縁也　かけひのまことに人もなれし里のかけ
ひの水ハおもそさらん　上東門院中将 拾玉雑三　かけひのまとりけひれ水
のみえてふたりすむ程のかくれそさらん　六條修理大夫 夫木雑下　引
合見るべし

隠家尋ね來しとき　閑居
隠家とハ今ハ身を何くにも老てかくして其かた成名を
ゆかしと山深くかくれ家なとにやうたて不及。あるいハまちを
ひゆくへのゝ佗ても色ハ静也。畢竟一心淡薄也。
大隠在朝市小隠在丘樊白　始知真隠者不必在

山林 白氏　此かく玄市雑引合見るべし
西行上人詠れし双林寺に住侍し時。二月十六日今
来く佛事行ふ事讀侍しに昔思ひ出て
沙河崇方。双林寺に住て。佛事を行侍しと今ハ
絶ていまハ昔の事を思ひおもしてよめり。玄玉雑
部にの見え日本にありてまての詞書に有
昔
そ　ゝ之のそ傷く詠ましいその二月れてはの西行
相かくハ花の本にて春之なんその二月の望月の頃
西行讀 古雑上　己前二月に双林寺にて佛事行ひし所に西行
の事そを之をさむらしとそ。えてといしが今ハ又その佛事
行ひし所も。年月をへつれバむかしに似ずらしとて。西行
すなちそ志のふ也　詩人玉屑云用自己詩為故事
須作詩多者乃有之楽天。須知菊酒登高會。從

此多無二十場朋年云。去秋共数登高會。又被今年減一場云云 坡赴黄州過春風嶺有絶句後詩云
去年今日関山路。細雨梅花正断魂。至海外又云。春風嶺下淮南村。昔年梅花曽断魂。宣考劉禹錫
字夢得。戯贈看花諸君子詩。紫陌紅塵拂面来。無人不道看花回。玄都観裏桃千樹盡是劉郎
去後栽。後生作游玄都詩。百畝庭中半是苔。桃花淨盡葉花開。種桃道士帰何處。前度劉郎又
再来。且言姑謫十年還。京師。道士植桃其盛若霞
又十四年過之無復一存。唯兎葵燕麦動摇春風耳
出女傳 こゝ迄我昔有一事とゝ為て作り詩也。此詩有
如奇而実白敏入之作 田家水

字とゝ結り後れ小百よいつゝもふる水のゝうゝか
いたゝもゝかぬいつゝといつゝ事もなく常住也 久月長さ
すや岸の松のゝれいつゝもいつゝ忘ゝるゝ 後人家ゝ
しのゝとゝう雨ゝとゝうれで いつゝもいつゝ我宿の行
素ゝ風冬 秋の田の稲を刈ゝれて 秋もゝうり比い。守人しゝく。
水の音ゝ。常住すゝうゝて さゝいく。水ゝ田家を守ゝる
ふゝくゝせゝりゝまゝすゝとゝいつゝよ。水の流ゝと縁の詞ゝ
なゝりゝも

等持院賜を大臣家ゝて　覇中友

行ゝくゝゝ名ゝゝゝ小ゝゝ 旅ゝゝゝ友ゝゝ
紅ゝゝくゝいつゝれゝゝらゝて 紅ゝゝ 旅ゝゝゝいゝ。かゝゝゝゝゝの及ゝれ
ゝゝ人ゝゝゝ一日ゝ。半日ゝ。かゝゝゝゝて。何のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝなゝけゝゝゝゝゝ。立列ゝゝく何ゝ。旅ゝゝて紅ゝゝく友ゝゝ

旅も面白からぬ物の旅しき物也。ハらりの字。我九字に
ひきはけしきみ旅へし。一日ヶ半日ヶ旅行つれさう名所
有れども見ぬが心也

夏旅

河水ハまだはしぢにすむか山かりもうるひみりあのは
五月雨ハ流晴もしい重しもなかくし晴るをまさ
ば真間の川の水の流さるべきまく。まはらぬるふ。雨は
かるしも先川をこえてゆかんやふかりは是のうれさんで。
旅のふるしと云縁也

雪護院二品親王家 後百首(百イ)
羇中見月

よしはだ旅路ハたえねハ草枕月を都の面影にして
みらのくれまのうやうくや原をこゆれど面影ハしてみゆくいよ
物と（皇女家歌合二）此詞をとれり。趣意しく見ゆるれどんとやや

ふるさと。月を見れハ旅のまに〳〵いく旅の枕ともはなれぬ一
句より見ハそれとよさおもしろく今よ月をみるへし月を
みれバ。都も眼前にみる心ちにおもひかへし。月ヶ都の面
影に成行也あをれハそのえよりて下知の詞也

九月十三夜。東下野入道素英（貞イ）後田大家歌入
道常端。ふく奇撰待しに　月前旅

草枕むすべバ露に宿る也　山路をくるよいたつ月のけ
山路をふくかぶく。草枕をむすべハ今までふく山
路を越り来し月も。同じ枕に。枕の露にやどる体也
ひゆるへし。草枕をむすでいいて露の宿をそふて云縁
小も成也「足引の山路の苔の露れうへに旅寝よふうさ
月をみるかね（秀能朝臣 新古秋）引合吟ずべし

将軍家めく　羇中嵐

くるまで風ふこゆるうつの山けぶりれて青葉に交りみさんん
字はムをこゆるうて業平の詠るうれしムへれう
はふも夢にも人を見ぬ也ゆうと有事をムうり
すらて見ぬを人うしわつかと有いはこふ。さやう
ぞやかひあるにいつれ。今夜も寒いえんまうぎき也。
ひさぐれいかよりり事とはして。濃うはうぞやる
とうムも也又はぬ事をかうべき事を。前方うさをあ
らんしいムをみくぶ。寒もえんざ
ぶんと云ても関ゆきもさやうんくいムあさうう
ムを出しうる詮もたれも正月毎七夕ゆ委しこ
よいものをれ字にくく。毎夜夢をんざしがうしい
も夢いんくばんとうムあ

猪山末行一句　雪中旅

朝よりごきムの路より絶れ雪れかりよりやう越給ん
早朝より。ムを行ぶさらて旅人の通りう絶
乃有紙ふて。ふをかくも。ふてる物か。ふかく雪の
ひうりとたりに。夜中ふてうさる物ふんうも。雑聲
茅庵月。人通板橋霜。引合ううし

二條前宰相のの。関より。ふりて雪れかる日く

うう絶ーー中行ーー　一巻あり

良基公也此時紀行

初うう。我方ふうどい雪絶れムう越行ぶやきうん
我身古ふてうる。人ふうぶいぶふとのムれ雪ーー越行
絶ふうも。絶をふうふて。ふうもいてもまいるべきふ。ふうふうふうう身
ふれいぶふ。絶ふる年乃。絶り。ふれうふうも。ふうもあと
ふ。雪乃。絶也。雪絶ムは。雪法関也。行吹ムぶ。雪ふ。ふう

述懐

又

良基曰 源千也

かゝるゝとの中山こえしかひなくてあはれとや君と一反にんは
雪の夢とりそ。夢の雪おもひいて君と同じ
人まさんぞや。さあらばゐる中の昔しこも忘る人まさん。
住をきらいて来る後世の残しおわさ也

入道二品親王家五十首哥よ

よ思ふ猶こゆべさと添の
たつし山に後の雪とふのこ身より
高師山を越てよわり。此高師山も高ね山ぬと。
中らくおとろくるれいが本にもおもむくこゝ紀しの
あらわれそ此高師山を越るらばもろや高し山と
有まじきしらへいて来にも背さそと思をねえと

ぞまられ。ぞんかみとべきぞこともよ一所よ。おもの方此これ
ば。今までか来し高山の雪ざまし。さらくこれいおも
もの年也。これそ。高師山の高ね猶も去りさうか。其のつ
とまらいてよく高ね山おろりぞぞきんとおもされて立る
俤也　暇ば又てゆべさと山の思ひれやうぎ月のまの
去りこも　家隆卿一首詠　山こと中へ一葉に落まりりゆくかに
思ひれ自をと　衣笠内大臣詩歌詠　引合見る訳へし。此也とくりたに。句をと然し。
西篇所よ出

いさりとるあまりやみる。磯部の今ほとより木おりさざひをとこえと
浦のかや。き磯またをれば。いさりけるあまりや見るん。読るゝ秋
をも切り見るんいぽ見るるん也。書こそば。おもりやろらんと海まれ
かく積の枝よさくいをのちく。磯のとへいぷよ也。若のわきたる
告らに押しえゝりさゝらく磯のさへき。ぢいほくと背れば礒

ろうにさも孤乃上につまをかくしたおくさを外
ちりをんばいさうをかるあ。あるんくやろうんも孤ちとう。
きさふぼうを木かきくんん。結りつさらいやりと

海路日記 紀ちう

をうたうり紅屋うあまいさう失れ新ろふうさいあるで行ん
ゆうくうたとくてうたいうにはつまちうう家乃
まんくうう。日うれあ。屋ごれ方をえやれいあるのいさう
失地ひくうゆうあ。うのあるごのかくこしひうく変れ
ちりう川べ乃屋うも我住方乃あるれうく失う行物
うれより出てる奇なうし。海とを行くぱりうれく。
いぼくうゆうもちうう失乃新をうてさて
はあまのもむあちんて。毎をうくご長りうぐ
さうく。海うれあうる孤うくううづも結りあるんく。

いうんでそくいてうわういあまうて有ってと。海をうして
乃也 寿百年たつあ菜はみつて万代をいうくんい神ぞち
乃んうせい古賀 万代のりあくうを新をうて今約束い
神ぞちうん 拾賀 ちうてちい井さてかうう万代い神
そちうん我君のうあいせ古賀 帰一時月墮 河洲臨。認
得妻兒結網灯 漢文陸亀蒙詩拾五

冥白願續百首 旅泊

新うまでお海へれかうる孤物そちうしうあれ家乃浦風
ゆうもかくゆうの家れいをやすみにうそれざりかうず
もうれ 泉或ちた 拾志四 例 そていあれかうる孤やどりて物さ
ぞちんうしいくぞちうた 定家千五百番歌合 あまの住孤乃とま屋
の藻れよいあうるで草乃ちうちうと久う 後拾遺 後古結 姫
ちあい。新ちうあうれ刈りをたうる蘆とひと

じて松よりとうふ。家乃浦風さへ吹てれば。とうふ一
丁も。祈るまいやなじ。さていたんこ。孫泊のうてこ
をよろう。妙をぬれかるるまく有ぬ引合まてよろう。敏
をぬ乃かもくくしたわてぬらんこいつ事ちりぬる
うはもしまりう。家乃浦未動也

古集五言絶百首ヨ　舟行て夜已深

此白出所未考

情たぐさ尾上の待ぞ空ゆる奥潭毎月さよや深ゆる
おくをこく舟こかてぬらぬ砂の尾上の待をゆメてごろ
ふ也引うぬ乃尾上の待れ事也時うけて哀やを
くん医房千冬　舟中にそい。何時ぬんも。ぬたぬ尾上の
待をきてぬ。ぬくく哀乃ぬる事をとる也。舟中乃
ふうくく

小義宰相中将家ものしゆ　海語

和田乃系何乃舟踏れ友をむ。ぬた哀海乃月ぬうち者ぐ
和田の系い。海也。ぬ乃海海月ぬ。夜ぬうぬいぬ中
ぬぬ紙ぬうり紙也。ぬ乃海夜梅ぬう。舟紙。ぬ何の友
ぬなく。空ぬ哀ぬうる月を友くする也。月のくくい
何を友ぬして舟乃上のうぬ紙ちぐさぬんぬ也。
舟乃縁ぬ哀ぬうぬ久

昌景上人坊にて　旅泊夢を

ちぐい夢ぬ行やうぬ濡れ信の物ぬ月をのぬくく
舟中い松の下に波のいぐさおくぬ。ぬる都の方れ
ゆくさに月をのぬくえるゆくいぐ祈れねばぬんい
夢ぬ也ぬをぬうぬ。ぬうく濡ぬいんうけぬる也。
松やぬ。ぬ。ぬまでい。ぬ海ぬ也ぬうぬし。ゆうぬと。

いよ〳〵やなぎへきゝし也。有渡濱。渡河也
渾正平親王家三首よ　海路
吹かける風をも待れさりけるそすゞの芦かるまこ党やらん
湊入の芦分小舟さはりおほみ我おもふ人にあはぬは
かれ　拾玄四　湊への芦分小舟さはりおほみ同じ人にやて
ひんとぶし　川分　湊をいでの風の吹かけるは。舟の
さはりたるゆへ。すゞの湊の芦へ向へこれ見らるらん
事也。本哥ハ。芦かさはりしぬしもよ。此哥ハ風がさ
はりなるゆへ。芦しげるへ帰る也
将軍家草菴集をゆ見ぎり待て返されし
中文よ
おはめける絡ぞかしこき和哥の浦の玉もくおね玉の数く
浦の波しうけそゆくり。并也　七夕の苔乃衣をいそ

いまはへ人をまくれかしもおそ返し　続古今秋　すらゆはる和浦
の川乃川波れなみかくもいで我こひわやも　万五　信乃白
〻かみはおもねし世て芦しらぬ君をようをたつるか
二　拾玄　人なみく〻ふも然。すゞしおるびんそつけそ　続　なくし
くれ人をよべてこそ　日　此和源氏よ知れ記詞也。和哥の
浦のなるみもうだ。玉の数くがきあかなる草庵集。
いつれもすゞれさる我なりしこれしお絡也。和哥の浦こよ
玉とびろよしるみ来ゐく。此哥ハ和哥の事にこよろく
宝り詩を金玉とへかま同し
中返し
詠んらんへいとんりも和哥の浦のそくだをそ君としてくさば
此哥しとおかげしぐ。お後人ぺ世人へそくづ也とそ。すゝろうとも。
なげく事ハあれ也でしさげしはっむもえをおしくるかな

よそ。実ハ君か御蔵兄ゆへ。兄なれバ玉も兄の有也
頓阿僧正。草庵集と一覧して。返されければ。和哥
の浦の名をあらはしながらも。難みがさける玉ぐしハ
かれこやさりし返事に
雖彼江のこにうつすれ玉ぐし。あつかれてふた
人を恋ふるや 後撰十 恋一 玉ぐしハ。石の事也。さてはくは。
玉の事ハいつ針也。和哥の名人。難くありしも。玉
かくのみぞさたるが。難まさぬるし。頓阿法師を
ほめたる也
いさや又みぐるしきかさ玉ぐしハされがし同じきんがしやとし
いさよしハ。ある事に候也。やの字ハ助字也。不知也。いさ
まぐるしや。まことにしみてよあるハ同じ人の顔などか
されていつる也。みぐるしけるのさまなども。私ハたなしもいさ

ありけれバ。此草庵集ハ。一通りの世の案内までにしく。又
二度とみるる桂合なんど給もなし。頓阿のかれど。是徒
おかしきがと。同じゆうれなお給しき也。玉ぐしハ。石の
異名なれど。僧正の哥にてハ。玉の事にいひて。返哥ハ石
の事にしてかへれバ。玉ぐし同前にハ皆まれに体
りんとも 同さやまぐる人の名も知るの打つ物をみても
袖のここぞしる 後人不知 恋四 同さやまぐ恋ひそ人事もしらかれ
ることもなりをいそぞ知られね 後人不知 恋四 此哥二首なりけり。
まぐる也。此集の哥もまぐるても此ゆる也。古来の本に又
とかきても 同さやまた月日の行もしられぬ身ハ花の者
ここにけつるそいれ 源師光 新古雑上 これハ又也
作さようへれ哥を。と也 作しを返しきれとしく
包紙り

伊勢の海のきよき渚に拾ひ集めし貝をとりてはるゝ玉ぐしげ

いせの海の清渚乃浦づたひ

いんぢやいろいろ　催馬楽 伊勢海

みえそめしかたちをかたくかくしつゝ

世間にいとまなくとてけふ

を過ぎてけふ

いにしへのしらなみなごりの玉あんばいていとなごれたるやさ

孝行清渚の奇岫前に出ぬ　あしのやれなごれたる

きいてゝ海をみたりけるもはるすきたるとり　信濃 新古 雜中

はるゝいとなをみたりけるもはるすきたるとり

また清の玉ぬいろいんぢやいろいろ世間ふいとま

なれいつのまに紙漉てかくれなごりく玉のえあり

わかをとゝろみ侍人来ぬ

小岸柳　陰朔 仁安

よ奇をすゝめ侍と清くをくぼとて

日とゝろ何岸に書とゝく侍るさ和奇に浦の

ゝふりをとりて侍迎来る

奇とすゝあらはれたゝとて遠ゝて初

よ侍奇をとゝくてことゝ也奇の広い和の事

をゝ侍くゝもぷゝくゝ日前の奇ちんぷゝ

てもをゝずぷゝ　をゝ侍ゝ　をゝ侍ゝ

をゝ侍ゝ　をゝ侍ゝ　をゝ侍ゝ

ゝゝ也奇とかゝを藻屑を掻ゝ也ていゝ

ゝゝぶゝをゝかきゝゝゝて和奇和浦ゝゝ和侍ゝゝぶゝ

前方和奇ぶゝ和ゝゝゝぶゝゝゝかき捨侍ゝん

ゝゝれも定て玉のぶゝゝ有ゝゝん定ゝゝかゝて

遠ゝゝ奇ゝ奇ゝ玉のぶゝゝゝれぶゝゝゝぶゝを捨

行ふ所の行ふ所こそ人道也

はるかた入道大納言四条隆親卿は内裏の後光厳院の内侍新内侍殿の父也。当時の

内侍殿也。こうを撫子と云べし。教訓抄

はべるとう。実右大臣殿大炊御門頼宗公

さうぞくの人

入道大納言は。為定卿也。内裏の後光厳院也。

関白殿は。二條良基公也。撫子とは。

すこうらぐいそ。懶の字也。俗語のふせうぐれ公。其

事にてまれ公也。明月は。道と明らかなる事

家道也。道い巧と云と同じ。拙いなりけるふ俗

和らとやわらぐ俗也

和らぎまいやすいかとてそ変物は道とうの変化あるとも

此方新後古今雑中の云後光厳院の内侍新内

侍殿。此道とはいかなる事なるとも事なるとも

ていさらに行をくるさまに有事をれは。慮外

むきはくに物かすてぞ。ものくにたらいけり。後の福光園院。

撰歌大成大花撰歌れいー返ー新河内

返文字撰歌れいーもかーこーとひもの宿ーとで

いうこうこん 拾雑下 撫子は物にたとへふちうこう式

部もいくで春の夏の夏のみ

くさふけるとれて駒撫子 重之新古春 式部乃の義豆のみ

いけるとすまれ公あるとも。為定卿へ和歌いけて

ばてそうこうこうとも也

返ー

やまとまでゆえけるれ和歌の浦の芦辺も芦辺も芦辺を

ふくれいあるとさてふ。まろこそといふ神くらんが。
さてもあるべくもあるのこと成。あまつかぜもまでぎこえあるべ歟
鶴鳴(ツルナク)千九皐(ナヤマニ)聲聞(キコユ)于天(ソラニ)詩雅 ちかもとこそぬとい。ち
をよしかもあるべくもあるべ。ぞ弁までぎこえ絶けるまに。
かくばかりなれ来しかもの
勅撰奏覧乃比後撰拾遺 藤氏物語 もとよりも
和歌の浦よ者ばひとぞいつるを縄たのさよあやとるべかるべ
さてもこそいはぬ。ゆゆしく神代。後也。清上月よ出さう。
氏後乃奇を。勅撰よ入らんまを。如何の吹挙を
いのまこそ。ぬてよりう。清ふかぬでよいてきるべきさは
なて縄を。毎のよるべよ引つまて結いれ。まるべでい。引
つまん入りなまを紙をめしとも。ぞるべい。舟のよも成也

返し

和歌の浦よ入めるふいかをもまをまをまをまをまをまをまを何ぞはけん
大方撰集よ入し。拾遺(シウイ)なるまを。ぞいるまを。ぞいるまを。ぞいるまを。ぞいるまを。
後撰よ入しまを。ぞいるまを。ぞいるまを。ぞいるまを。ぞいるまを。ぞいるまを。
出家 中宗長家入道 彰拾遺よ入る。ぞ奇を。ぞ待しを。
ぞ待しつるかな。ぞ待時
新拾遺集。後光厳院。貞治三年。四月廿日。四
季奏覧。民部卿為明撰。不終事為明死。同
年十一月十三日。頼河終事。拾芥抄二云新拾
遺集。廿巻。貞治二年。二月二十九日。民部卿為明
卿。奉綸旨撰之。奉行頭辨資定。同四月十六
日事始。同三年四月廿日四季六巻。且奏覧之
而返納以前。同十月廿七日。撰者逝去。仍遺諸
返納云云 勅解由小路二品行忠卿清書云云

此詞書の云へ新拾遺集ハ。万葉卿撰者の外
も。死去して不成就。新河撰給ひ也。さる
ゆへ。長秀卿。新拾遺より入りを。新河へ移
うばゝ。かさ付くゝ。ほうりとして。流くゝ中絶し卿也
ゆゑ。とゝ。公氏を。為と。家りあるべき神てし家絶れ
長秀の卿ハ。新河のくゝ。ゆゑ。何とて。公氏付
らるゝ。ゆゑ。ゆゑ。新を。ほうりて。神てしといふ。さて長秀卿。
新拾遺より入りを。公りまのゝ。ほうとゝ。一説ハ。新河
の卿ハ。事。四。長秀卿。抱ゆゑ。拾遺ハ上
ゆゑ。成給ふ。為く撰集ハ。入給ふ也。此度新拾
遺より入り。新河の卿と。清秀ゝ。長秀ゝ。
とゝ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
給ふ。ゆゑ。さて新河の卿。後千載集より。ほうして。新

拾遺まで。在生の間。五代の撰集より。神也。新拾
遺。新後古今にも。卿ハ入ざれども。此二集ハ。死後の
事也。新拾遺。撰ばれ。至極。老後の事なれば。明日
をも。ちらん。命也。ゆゑ。撰集より入れ。ざれまでなりと。
ほうい給ふ。公りまゝ。ほうとゝ。ゆゑ給ふ。
なりゝ。人き死

返し

ほうとゝ。ゆゑ。人の。ほうせて。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
長秀卿返し。卿也。長秀の卿と。新拾遺より入事と。新河
の。ほうとゝ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

しにまうせるうゑ人、業為乃ゑみも物こゝ波よりづよこ
ろ波の乃へ入ざりし。物行の高恩なりとこゝろ。さて
集て入し事。物行の仏入ゑうと。術とゑ仏ゆり也。波ゝい
わしわれば和方れ道よ難しゑゑこいゑは非。乃為ゝ
波よりゑといゑ。でゆゑゆ人。自負自讃乃ゑよいなゝ
ゆゑ也。ゑれ世の人も。和方ゝ高ゝよ沿ゝず。諸藝を学ぶ人。
とよりよいゆいくの生れ付て。第一い修練ゝあり。
ゑゑい上ゑになゝばゝも。條をゑゝば迷ゑゆ成へし。
すゝをゑゝん円いゑゑしひよれ方ゝゑゝゝも。波ぐゝ
あゝゝゝく。その。にいゑゝ。此境をよくゑゝべき事
なり

蘊堅ゑゝて人ゝ方読行ゝ時　述懐

人ゑゝばゝゝゝわくゑゝん八十まで、和方れ浦波ゑまゝゝ乃為を

八十業ゑまで、わゝゝ人ゝゝに波ゝゝて。和方ゝなゝゝよゝむ事。
他人の身をゝばゝゝゝれき事ゝ。後世ゝと事一
ゆゝゝべき身の。狂言綺語ゝゝ波ゝゝゝ。何事ゝ
なゝゝゝゝ。我も学ゝべき小。身のゝ人ゝ師ゑゝべ人乃
ゝゝん事ゝゝゝゝゝ。波ゝゝゝれゝゝ。身をゝゝ
ゝゝゝ也。ゝれ和方にゆきゝゝ。日ゝれ行踏ゝ波ゝゝて。
をのゝとゝゝゝみゝべきのゝゝゝゝゝ人ゝゝ也。和方ゝ常
ゝ狂言綺語ゝゝて。後世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人ゝゝゝ。ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ所の風ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝゝ仏れゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ。氣ゝ
ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
詰ゝゝ。心悟則縛ゝ迷ゝ心迷則縛ゝ迷ゝ

又白氏文集より讃佛乘の因縁とあり
古集五言絶句百首に　天色無情後
こゝ絶えれしおかしき空をうらみかなしむ人をもいふ然るに
此詩句未考。前の心は世に捨られて。それよりこゝ事
をかこつべき中にもあらねど。天の心をおかく。空しき事ふ
向くも身をかこつ也。人は我をつゝむわれもおもひもい
こゝだあまりにれなさけなれ世人の心たのもしからでもうさ
をよし天にかこつ也。離家三四月。落涙百千行。万事
皆如夢。時々仰彼蒼 菅家後集十三　舜號泣旻天 孟子也
あり世説曰。晋殷浩被黜。終日書空作咄々怪事四
字とありしもなまきいふくらき事ありてそ人にいはれ労
附ハ天に向ひてかこつ事和漢同意也からのハ恨の心
よ物ふかてはまる事。此所ハ身のうれ事を天の

ちらん事のゆられ恨るも
聖護院二品親王家　後五首　寄月述懐
老ぬれし袂に宿れりしほし涙ようしき秋の夜の月
袂に宿して。月を見んとおもへども。月を見れば。哀ねよ
かされて涙のこぼれてまし。月をくもりて見ゆる様ばぞ
のぼる月のたゞしくもしく成ゆく袂に宿らする。
うひもなれき也。物さびしく。此しき時ハ。われだに月も
詠るなぞかしきハ。又涙のあまりかされ歎いふ也
関白殿より歌を結く續てまつるに　述懐
何ふるもふ侘ん世の中のうきハまさりて老ぞ來るのる
むの身ハ無かるに。何事に。心のよする事ハなく。月花
至外何よりも。面白き事ハ少すくなく。ぞうれ事の至
月に淡さるのこと也。うきき事のみまされど。心のまづる

りきまくいつる。老のまさるは。老の
後さりくるを也。年々老去歡情少。處々春來感
事深。白氏十五 陸務歡 老色日上面歡悴日去心 山谷十二

入夏二京親王家。あり十首云々

身はいつくと老てを歎んつて浮世にあくがひまをうれ
ひ門の事をもしづかくてもいかに暮とあしき浮世の老
をうつうつ仏身はいつくとぞ世はぐさ仏にさされた
げさ物也とうれまへかげもかげくへ浮世れしさ
しく。住るれうもいとをうさ事也

古今 詞わく方法世の中へ

見引のとりまたくかうれんうた世中いはる
うしもの 後八雲 古雅下 古今の一句を入くに殺ちしに

何事もそもしの也

かくいうう浮世中へいつくていつくかくれ習しいあるん
かくつくへんぐれかくも也。待郭をよ妻し。何ゝつけ。たつを
これなどぐれ世事をはそやくいつくべさ事なるうう。
つくしいぐさきはいうるうるいぐ。いつなるう子個ぐ也

性融 多芳基 村人道 老ぬほ。ねこすみ住く用情西て
くくくくて。そぐくくや人いみうん老ら月いあるを
いつぐよ紙ぐをてあるくくもて行し過るり小

我田舎へ行を。人い志人の事ちしぐ。世ををむ
き。安国の言さんなんなりんぐ。ん。そさくは
邪ムくくいそいかくく。ぐすやんうさかくて。世
を捨ちるぐ。也。世俗はいつる。世氏捨るふあ
らぐ。世にすをそれうる也

人は皆うきを思ひとぞ世をすてやまとこそ住なれ
世をのがれ人はおもはぬ事あれど心ぞ思ひとぞ
うきなれこそ思ひ出ぬ事あれど心ぞ思ひとぞ
な

道ゝ心ゝて行ゝまゝすべし。つゝやゝき身さへ捨ゝるゝ世を。十善の天子れいゝゝひとゝて行ゝをうゝきれば後ゝの百代ゝゝ。ゝれゝたゝもまゝざゝるべし感ずるのみ

兼實の殿ゝ

曉述懷を

り来れゝらゝき紙ゝで昔ゝゝ思ゝゝ老れ猶ゝ恋ゝ

曉の鐘ゝこゝゝゝゝゝゝの事をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

嫁抑也。老い人今日明日ゝゝゝゝゝゝ曉鐘のゝゝ

き事をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

將軍家ゝゝ述懷依人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

老ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふゆ人はくるかなくるる也。ふてゝつゝみよりて。老の坂をいでゝくるる也。あるもうゝの縁の字なれば。まゝしゝし。同名也。まゝ中りべき事を。前まゝ中しいて事也。西行撰

述懷の歌

作者守貞世家ゝ　　山

今川氏也

そゝぐべきみゝれ奥れあるうさぐ何をうき世にあるまゝこゝはせん

世のうゝ世はいとゝやゝ山ゝ入くゝ。うゝ世をのがれんやとおもふ

あるまゝれ有ゆくゝ山をなぐさてあるかりゝ。奥山

ゝゝ物のなくゝ。何と世のゝゝ世のゝゝ何乃。あゝ所れゝて。山

をなぐさめやすむべきぞゝゝ也

撰所の比和可有ゝて　述懷のゝを

ゝゝはせよあゝふやゝの山ゝ山ゝゝを初の花いるきれど

かゝる世いゝくれゝくゝかゝる世也。老の春ゝは。世はのまゝて

いゝ所ゝてあゝるゝ。又何事にゝても。ゝれ所命にて。

長生ゝゝる。うゝの有事ゝゝ。時ゝ命ゝゝゝゝ山也。春の歌

ま出ゝゝゝ。ゝゝもいゝ。ゝ世でも也。さあゝてゝ也。さあゝ有て

も。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。

ゝ。扨もゝなゝゝゝゝ。又愛語乃詞ゝ。さても久ゝく

あハゝんゝ。なゝゝゝゝ詠也　歌さゝゝゝゝ。ゝゝゝ

をこうきゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ

命ゝゝなゝゝゝゝゝゝゝゝ

考証の書はさうしとう抄き也。さしも詞の花乃勢
遠いやけまこと。撰集入しいかゝ命よ者てその也世
ようろこび也。まこあるようてゆ乃ゝなくようあり。春ハ
あんぐも詞乃花のなれをそつ也

新拾遺えらしいけ乃ゝまこけ乃ゝ。紙をさぐて
所よりかゝよ同しんを

新拾遺集撰せられ事果て十六首前ハ
ゆは給入ひこぎあらいづゝ松ゆらいあびゆ神やうてん
いづそ舟堀ひこぐいばそ乃舟れ榜はゆ音いうそば
みをそゆもう 万廿 ゆれ乃れ乃ひこぎ出るいづて舟
かゞくゆ法ゆくゆ忘いもばげん 家持 万九 いつく舟をし風を
ゆゝ波ゆゝゆみの浦ゆゝ乃ゆ白浪 昭懐院 拾遺集 袖中抄云。
いはて舟ゆは。無い伊豆國ゆ作り出ゆゝれいもかゆゝ

ゆゝ。日本紀第十五。應神天皇五年十月。伊豆國
ゆ乃ゆきて。長十丈の舟を作りしむゝ。奥後抄云。
舟こぐ者紙ばいくゆとゝ云。かゝくに一人づゝ。合せて二
人を一手ゝゝ。五ゆゝは十人ゝてゆく舟也。和語抄云。
いはて舟ゆは。かい一つ。櫓四有舟紙云。神代巻ゆ云。
熊野ノ諸手船ゝゝ有。兩手ゝてこぐゆゝいつ。所の
船。五さびあいゆゝ。五代乃撰集ゆ入ゝを云。歌河
法師の所れ入ゝ撰集い。後千載集所ノ一首入後宇多
院。文保三年已未四月十九日。前大納言為世卿撰ゝ
續後拾遺集。所二首入。後醍醐天皇元亨三年民
部卿為藤撰ゝ。而不終篇死。ゆ恩權中納言為定
卿。正中二年相續終編。風雅集所一首入。萩原
法皇所自撰。貞和二年十一月。新千載集所四首入。

後之嚴院延文元年六月十日奉之。同四年四月廿一日
奏覽之。入道大納言為定卿撰之。新拾遺集。六九首
入。後光嚴院貞治二年。二月廿九日。民部卿奉綸旨
撰之。同四月廿七日。撰者死去。杉原法師。終命。此五
代集也。新後拾遺集。六八首入。新続古今集。六
十九首入。といへども。此二代の集は。杉原死後の後なる
また。五度といへども。五度。撰集の所をもとて。六
の入り。玉津嶋明神の。杉原の六。出納受のり故
なりとも也。いつて無。五度は。向れてできぬ。そのばつをうけ
しる後也。五度は。後。紀列。和六浦よ者

懷旧

真よ月ふい物しいでで文れ業為れ道よ云ぬ物しる。でい
物しいでしよ。ひこ一方うて。何ともも物にうれしうはし

来紙。今ろろい出よ紙和りいでしいろう物しまま来ふ
張ろに至てうろ一来し。杉りしいづれども。先物しいで
しは善事の方に物りくまろ作例正義。社部之盛
ひろいて中物の月のろ。六のふいかるふれ身よ
は。何のろいでしそいなし。ぶろう物りもし。和六
の事よをそいつて。かるる六をよまろ。ろの何ろば
六とよみ。と今しそれよろいてるよつろう。昔
のれりいでも

法大寺門大井家追吾経料紙六ろ上ふ

しま懷旧

ろのそれかるるよのろいろ出く思れ霧よわるく神れ
一二の句ふ和りれろのして。維行し友達ろ六ろ
會なしせし。昔の世れ思い出ろ也。ふかの世事を

ばかりしも出あるべし。思ひ入り深い。世づる草の家の事うたて。
昔を思ふ人深く袖のあるべし。こゝのくさ〳〵そこら。世づる草
を出づるこゝろ。かゝりしい義の縁也

恭花園のもとに敬民の家を去仏事れ行く
前後行く　懐旧

故民部卿の為也

業秋の名人とかゝる侍えても老れ仏をはなるゝきみん
事人に品自也品の紙。業自紙。昔孔丘とゝ紙しぬの形見こ侍
えゝくゝ。ゝゝ故ふと。老人の仏をはなるゝて。法事をし。去
ゝゝ也業秋い。業年の秋ゝ。一周忌。三年忌ゝ。成ゝ
れゝゝ成ゝゝしいまゝゝ也
ゆゝた大仏言かゝれらを作は法下紙法ゝをく
ゝ作ゝ

為定卿也

春ゝ日ゝのゆゝゝ色ゝ別ゝて世れゝゝれゝも思ひたゝゝゝ
為定ゝ世ゝれ花の色ゝ別ゝて世れゝゝれゝも思ひたゝゝゝ
ゝ。世ゝゝゝれゝも。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。春れ花の色ゝ。
短歌の所ゝ入ゝ業ゝれい。紙ゝて。ゝれまの縁也。業の歌
ゝ業ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

風雅集
千載上

返し

ゝゝしゝも花ゝ世ゝれ業ゝ老の仏れゝしゝたゝ
世のゝゝれゝは。業ゝ。古来のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

わかれ秋はいまぞ古郷のかなしかりしもそこにしたがう
きぬぎぬ人のかをもとめ秋しかりしたちかの也

二條民部卿ハ為家也

仲秋をもて秋しかりしかの人をもとめてゆくはかりの

民部卿ハ為家也

こよひ秋くるかぜかやいかなる秋れ月をみてさいかくるぞみ
涙をぬぐ七月くの歌をさ降こそきて人日四十九日よりに
くくるくるこそ来るれば人やいかに涙いあるもぬきたこ
しまぞ月のくるるいかなる来ぬる也

五十

為家の返し也

ながりけるをもとつくど秋れ月れ秋れ中に神れ眠る
くるるこそ人ぞ仏まのあるくるれ来也まれい涙のそる

ふ来のあるけまぞ人なるくるこそいかわる也

二品親王家新大納言なくなりて人の家に墨
くれこそいいでもきくよりすむこのくれ
来風どいふ言をよりきけるうちぶんをて
をとりくる徒物語をもて

二品親王の家新大納言の孔きはの人の
墓よりよりし言也。りの信仏い新大納言の墓
不のこれ孝乃来風也。れくるる結仏ありり也。
りの返言とんて
言をくるくるこいかまし同しすれ同しれ
同し世世に森くぞ行かよ山路をしぞ人やくしいそくた
くくいてかくりもすぐくふ。なれあくるれべくいて
くもせんるさまくてぞくるをげさのくいくるぞくとべさ

ゆきかう
淨河上人入滅ぬれば九月盡日飛河許より
ゆし

秋をだに惜むに人のよれおぼえさるをいかゝのぐん
をぐさ別ハ死別也。永訣也。西翁の哀傷ハ八月十五
夜より杜子美詩を出やり（侍）すれとうんまてこそ一百も
人れ世の永さ別よりなし（拾遺上）ふるのゝくれの
続かけそのゝ老さ別の新をこゝいて（行くさき時雖遠雖下）九月尽
は九月晦日也。秋ハ去て冬ハ来ぬ。冬来ぬ
さへ行しむ人の世ハ去ゆくふ。淨河の水さ別く。二
度来る年のなれるるれいつゝ淨河の水さ別く。二
ゝんゝゝ也。此世ハいもゝゝ

返し

人の世れをぐさをゝゝるれ秋のゝれ
淨河の長き別ともゝゝ。ゝれ別ゝ
まゝ。ゝゝれ歌さのくゝるゝ也。別ゝ人
ゝ住ゝさ宮ゝゝゝゝ。別ゝ琴の音ゝす
ふ（拾遺雜下）

二品法親王家五十首ゝ

詠ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
風月の表をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
べきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
道ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

和（ナゴム）九人無（白ヽ）

民部に一両にて弟子の仕人を奇後行しよ

懐旧

ちりあいて仏うえをこれ法のをしほせなべて花ぬぶ
一周忌よ光ぐり合くぬ人くゆかくなさ法をしい有
かぐよむはのしりさぬ歌うの在世ての和有の合
ゆしぬいたう法くくくと法くくよ行ともつくく、
くいたくくよ也

源之政 秋人 身ほうそに又之助 えぐくよのか
らいとくくさくうもこれうよいちくまざうき
ゆとりて行く逐つゆ
老サ不定おてるにおくくも世界のなくい
しぬくくにくいくまれくも今身おくくようう
てはぬいたくれず逐つも仏別とつくぬのく

ふれをたちてよりう
ぬて世ぬたぬいまれ別路をんのいたくまくんん
おのれされぬのい常の道なぬれされたくくて世ぬの
おくくおくい先い新しいもまれくゆ年まれべはくて
乃原ん逆つんも仏ふのうくふ仏のうくく
くして物も世ぬくくも人のおくの仏いゆくにおく和
ぬくぬ別れくくの原ぬいゆくおい 千載集 仏離一 別路や 俳
遊乃方よくくくぬよくて縁の詞也
民部にかくれられて仏歌世納言入道 在原 知盛 の俳
歌れうふ乃ゆくこぬ原ん同一老ての来れ和ゆく
民ぬの原ぬ世れ別うくう新河乃仏のゆもこれ
てぬくいくいゆん民ぬも新河も同一老人の来
ゆれば一入のうゆかくぬいゆくんくも乃の和うら

事と名所の老曹にたとへ侍るべし。所詮の老曹にたとへ侍るべし。所詮の色のこゝろにぞくいろ。老曹杜。道の也

返し

我い報考れば杜のちるさかりをげきれのもに何ぞ侍るべん
同じもの人といつまでに我い一入年も深うる身なれ
ばさらぬこゝろをすべうふ。何ぞや。詩ぞ。歌ぞ事ぞ
と也歌まぶ木乃花をこゝろる也

寄花釋義

それ中に花の蓋とうつをれば水に浄しまの人を
花の蓋とは極楽の品の蓮華也。一切往生
の人皆彼寶池の蓮華と。化生なる也。法華經曰
即往安樂世界阿弥陀佛大菩薩衆圍繞住處

生蓮華中宣座之上。往生論曰。如来浄華衆正
覚華化生。楊と涼しまの花をぞ。ちりも水紙さ。
うつまく。極楽乃蓮華也。華嚴云。生まを行ぐ
しなり

蓋堅月次と釋義

濁りと咲や蓮れ。ちるあれど水れ。ぬ。ぬ。ぬ。
蓮のこれ。ぞ。あれ。水乃清濁とは。ぞ。花乃咲
ぞ。若人。今佛のこゝろ行ぐ。ぬ。ぬ。花の清濁
とは。ぞ。浄土と往生と煩悩濁
乃ぬ。喻。実や蓮とは。往生の果と喻。ぞれ。公
仏の因と喻。今佛即往生乃因。ぞれ。ぞ。公仏乃切
德ハ煩悩業障の泥ぬ。ぞ。ぞ。蓮華ハ泥中
より出ぐ。泥ぞ。ぞ。ぞれハ貪瞋癡煩悩公

中ゝとなるゝ念仏し往生の因となりて不往生
ふ也水ゝ心ゝ入ゝ清ゝ清ゝ浄ゝ心ゝ也念仏
勝劣の二義を異ゝ人ゝ阿弥陀仏の本願の行
なれい餘行ゝは大ゝ乱ゝ也往生論注曰譬如
清摩尼珠置ゝ濁水ゝ水即清浄若人雖有云
量生死ゝ罪濁聞彼阿弥陀如来至極無生清
浄宝珠名號投ゝ濁心念ゝ之中罪滅心浄即
得往生 引証 あれい岩にも松はすくゝ立ゝ
らいびあいばゝゝやい

昌余上人坊ゝく教ゝを

法のゝ法ゝの水ゝ心ゝ蓮ゝの上ゝ露ゝを
はのぼるゝ月ゝ水ゝ心ゝ上ゝくゝ
風 拾玉五 月ゝ水ゝ心ゝ上ゝ月ゝ松ゝ

て事紙 同四 心上のはゝとゝ
ゝ人ゝ今ゝ世ゝ
みゝ
聲ゝ香味觸法ゝ六境也
塵ゝ六ゝ境ゝ心ゝ
ゝ
民部ゝ一回れ仏事の時一ゝ
安樂ゝ
經曰又不親近婬欲獵漁捕
獵漁捕諸悪律儀
陸奥れちゝの法ゝ
ちゝの法ゝ法ゝ
ゝ栖ゝ

[illegible]

[illegible]僧正良辰入滅時[illegible]百濟寺[illegible]

二首[illegible]注[illegible]経五百弟子品也

百濟寺和別也

[illegible]

五百弟子品偈云譬如貧窮人住至親友家其家甚大富具設諸肴膳以無價宝珠繫著内衣裏默與而捨去時臥不覚知見人既已起遊行諸他国求衣食自活資生甚艱難得少便為足更不願好者不覚内衣裏有無價宝珠與珠之親友後見此貧人若切責之已示以所繫珠貧人見此珠其心大歓喜富有諸財物五欲而恣[illegible]

[illegible]

寶樹多花果[illegible]生不退樂

経曰我此土安穏天人常充滿園林諸堂閣種々宝莊嚴宝樹多花菓衆生所遊樂諸天擊天鼓常作衆伎樂雨曼陀羅華散佛及大衆

鷲の山は[illegible]人もとりて[illegible]やうん鷲の山は常住者なれ[illegible]末の[illegible]天人[illegible]常[illegible]花をふらんとも也人もとりてふる人もれ[illegible]とりて[illegible]同じ人もれ[illegible]人もとりぞ[illegible]常[illegible]者なれば花の縁也

法大寺門大伝家[illegible]退[illegible]経[illegible]紙[illegible]

[illegible]

無量壽經。四十八願。第一云。設我得佛。國有地獄餓鬼畜生者不取正覺

おしからぬ雜供はれんつのうれんなんぞ方に漕ぎてあるを

あしかるべいかを刈しとついて。西のうらとしつる後也。若

なくてあるうらとうらとうたいて雜供の浦ぞ行くべき

拾遺雜下 大和物下 みつのこ津也。敷津。高津。難波津のこの津也

雜供はんと者ふつうそこ津の浦ぞこれや心世をうみ

つうう舟 伊勢物語 雜下 芦刈しこの津のうらにてこ惡道

のうらうれあまきとつて後也。こ惡道の名をも国々方

こと。極楽とつう。極樂とこ惡道の体なれのこう。

又こ惡道の機根の名もなれ也。往生論曰。大乘善

根界等無識塵名こ惡趣。名こ惡趣。名こ惡趣。こ

惡趣の名もなれ極樂へ往生せんとなり

八道二水親王家。五十首奇

昔より玉川泉の流てそ作井よ寒池しるるを

観無量壽經曰。極樂國土有八池水。一一池水七寶所成。其宝柔軟。從如意珠王生。分為十四支。支支常時盈滿。玉の泉の流としつる事。天台智者大師。當陽縣玉泉山。流出しゆいよりの茅屋を玉泉の流とそ也。之祖の智者大師。西方願生の人なるゆへ。この流を汲人。皆極楽を願ふ人なるゆへ。繰り宝の池よりいとしつるも。高くひて乃彩へし。和漢の天台宗の高僧。こ流に西方願生の人なり。

もとしなり。此事と奇の西方願生の人なり。

根とよみて色よ心もあるとそ也。極樂往生

あるとそ也

是れらの人は釋教の学ばるべきの
しるし
釋とは西にて入るなり西へ入るの月
月の心は西を為す西へ入んと欲する也
釋とは西へ入ぐ。西方極楽へ往生
を願人は阿弥陀仏の願力にて必順次往生
せしめ給ふ也。故に一生の終り時次乃ち成就
ハ上り

亦按ずるに大臣家は星にして天地と共
滅とは云へども
大元の星のことをいふなり若ずれば
星の位 書られし星の位に彩色并に序
いつるかをあ 元日宴会の
六百番 書言故事曰元命苞。魁下

六星。兩々相比曰三台星注魁下言北斗魁星之下
有六星。三台者有上台中台下台。每台兩々形如雙
月故曰兩々相比。疊為三級曰三台。史天官書中
宮天極星其一明者太一常居也。旁三星三公也。
正義曰三公三星在北斗魁西。并為太尉司徒司空
之象。漢書律暦志曰。魁下六星。兩々而比者三能
三台色齊后臣和紫微宮內有紫微星。是則天帝
也。其左右有三台星。上台星号虛精星。守君也。中
台号陸淳星。守臣也。下台号曲順星。守民也。隋書
天文志云。天將軍十二星。在婁北。主武兵。中央大星。
天之大將也。左星為左將軍。右星為右將軍。將
軍星即旄頭星也。大尉等は三公ハ。天乃三台星を
象りしるし。天地濁れとい乃ち叶ふ乃れしるし。乃日

ふ物院殿の御夢想の事なれば。天にも将軍生れ有て。
天帝を守護して。天下を治むることいとゝ事をよ
うるわく。天地治まれば方と相應とする也とゝ

　　芝河居家にて冷泉宰相卿よまれし

神祇

神代も是人をゝ神代ばかりとてさたぶたゝ義詞の石
古今序よいとくこの所ありつらひをはぶきけり所
よりいてきふるり　あまはくうきけのちさうてめぐゝ　をかあれどを
世はさいつる事ハ久しくのあめあしていまゝてる姫
けぶきり。あるれのつらにていまさのをれみてとりぞ。
れてうけるちやるる神代ちは。ふれりぶとはぶきに。
するかにて。事りぶ。まきがうとそしく人のせゝめて。
ゝのをのみてとりぞあれうひゝりいよ

みゝる。神代巻よ。陰神（ヲミ）先唱（ナヒテ）曰。憙哉（ウレシ）遇可美少男焉（ヲトコニアヒテウルハシヲトコヲエタリ）
云云陽神（カミ）先唱（ナヒテ）曰。憙哉（ウレシ）遇可美少女焉（ヲトメニアヒテウルハシヲトメヲエタリ）云云　按ずるに
ちゝそる姫の方。すさのをれ奇。神代巻にうるぐ
らをはして。神代のなぐりとまり。姫ほのれとを紙
く神も世方れ石とゝ。守りうるへ神代よりけぶきり
なぐりて。濁世末代物ぐふむしの石いれうく
ぎれぐも。ちとぐふ。あるえ中ぬい。安時の石也ぎとえ
やなも。神のあぐこるれいゝほりうへゝ也ぎす
ぐへ物のきれしるれ神ぎてどこゝにゝりて方ぶ
わりう。四方の意新よ出てり。安時の道ハ大和方と
ゝよ同ゝ。安時ハやはゝくいてゝ同ゝ。四方春と考
頭方ゝ出てり

日吉社よこうし

なぐらぎにまちたるこのゐれをくべき行とうつる
社にまこうして行るゑ。願力のみちゐまこ。らつ。ぎゐ
くゐゐくべ。なくらはこのゐれをまれをぞすしべさ
こゐ也。子細いまこ紙りてこくべき行のこくべき行
なりこぞうつ。うけ結ゐ。冊誠のこゐ行こて。行
ま恨いゐ。法かまこ。紙ゐこて。行こべ。ゐこぞう
寺結こくまこ。卵のこくべゐこくゐ也

神木清五落こ。十二月廿いる。大寺院より出受
ま清後。寺法奇こて　思いこぞ。神のこくべゐの
みち絶て書こ。こゐれ結るべこ。こて論して
結。出文ま

数ゐ。ゐ我分れこの恋こる神ゐ人牲紙いこ。こゐ也。

ゐくゐこる神もこいのゐれいこて年つくこうつのこいゐも
こゐ人九拾神神こ人物をこいて。こまゐ五落ゐれいべこれが我
卵の恋ゐこる。こ也。神本ゐ五落ゐ。ゐいこゐ。神こいこ
ゐ叶ゐこゐれゐ。日吉の社ゐ。榊を禁中へいれ年也。
清興をこゐ寺。諸家の記録。年こ平家物語等こ。
成こゐ寺也。春日社神木も同。大寺院ハ。宗良
ゐれい。春日社神木をこうこ。結ゐこゐ。結ゐこゐれ人
なこの結こゐ。卵を早下していこ。絹也。貴人
高位ゐ。のこまこいこ。元より結ゐこゐ卵ゐこ。多
こいい。こ及こゐ寺をいこゐれい。制してこゐ也

色〜

まこていれこゐれこ。こゐこ。春ゐ。ん。を神ゐ恋も
春ゐ。ゐれこのいこ。ゐ。ゐ。ゐれい。ゐこゐ。神の恋も。

いくきてぞくれやうふ成結ひ事ぶ。花乃ひ乃くて。同じ世う
うあるべきことなり

法下紙詠すあ結ひ祇園。社三首　神祇

ゑ向てを見をもうをよ神垣の林ゝちげさ木れ繁あた
ゆかの人ゝそのを名ゆゆ。のぐよ神るかけゝのぐ乃花
ろごろを。林ゝちげさ木乃繁れどくよ。祇ゆれどこを
序　此詞を下句ゑ用ゝ祇ゝう。心奇い。林ふちげさ木
の繁れどく。祇ゝを事もなるれども。心乃深を尽して。
ゑ向てをさげちるかけは。是をもうけ結ゝを也

贈を天満宮おすす社よゝてもゝまゝて三首小

神祇

君をのゝ世ぢごまゝうん神垣をあてぐまゝてもたゆ。なゝをこハ
神を作ゝ心乃深。君のどくゝなゝ。をめゝちけまゝば。

ゝりつゝ。君をけゝ。神も世ゝり結ゝうん也

冷泉宰相茅ふ花園ゝく奇ゝよゝけゝよ同ゝんを
世のをゝ世あゝふけゝき結ゝ紙ゝれどゝを神代のゝを。ゝ
古今序ゝ　おまのゝきゝくゝのゝゝくゝゝゝゝゝゝと
なり結ゝゝ事といつる奇也。神代の考れよんゝくゝし。
ゝゝをゝゝゝゝ久ゝくゝゝゝくゝゝ事也。ゝゝゝと云ゝ久
しき事ゝ。をゝれ事ゝふゝ也。ゆゝしいゝゝゝ。ゝゝゝる
なゝ。ゝゝ久ゝしき事也。結ゝ縁ゝゝゝ。天のゝれ世
の奇れ事ゝ。数ゝ万年。ゝ紙ゝ事ゝれゝゝ。ゝゝと祇
神代のゝ奇れゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝれ神のゝゝ也。
とゝゝ。ゝ也。結ゝ川をゝゝゝゝれゝ。神代のゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝ結ゝ縁也

和歌一百三首ゝ　雲神祇

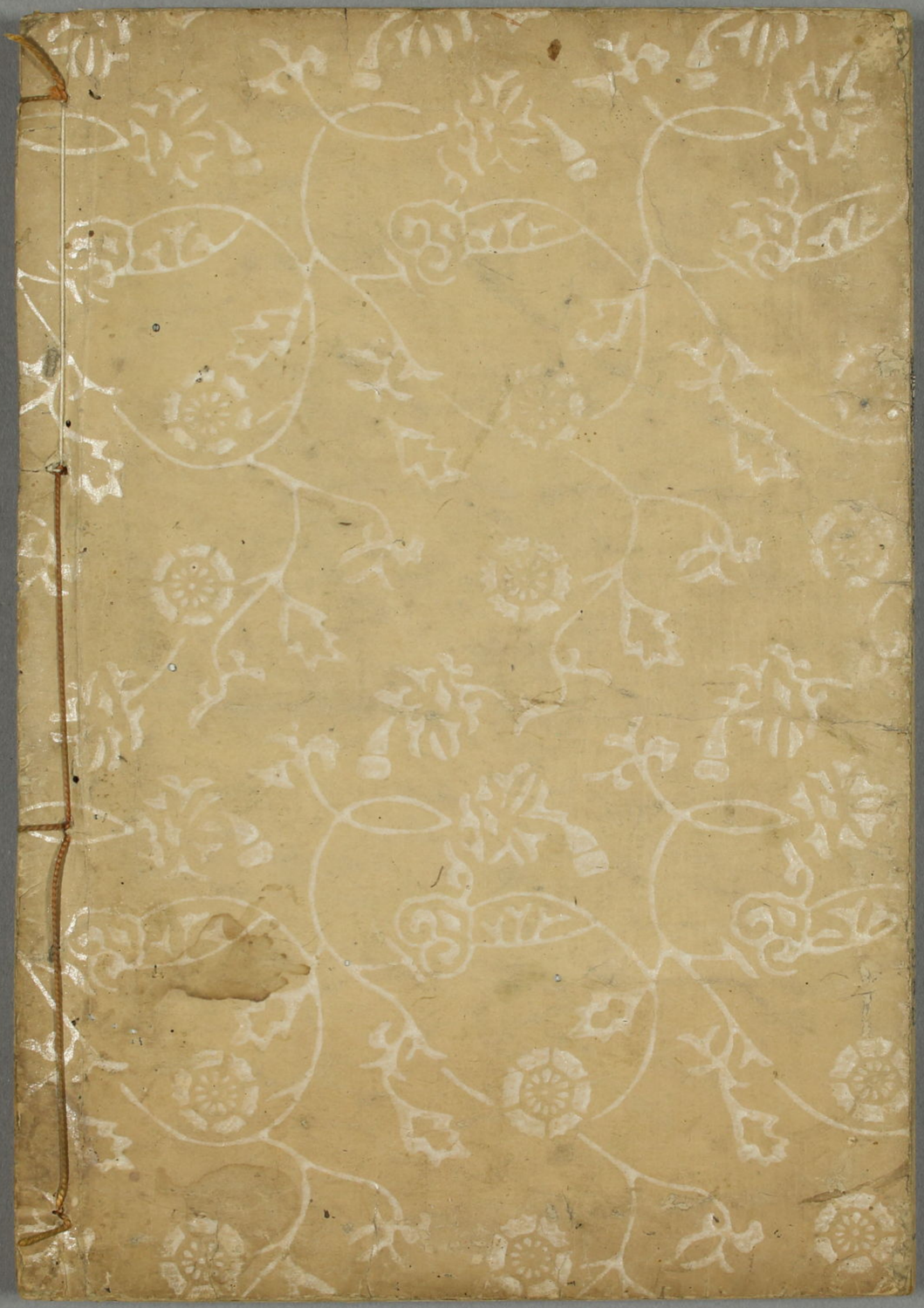
信吉れ神しまもまこびこんづづきされ久しさ代までなぞけくん
端雜の久しき代よりいとい枕詞也 ゆるまもと君いもろ信こぐ
姫の久しき代よりいとい神てこさ 信吉れ歌信也 彩古神 もろこしあるぐ
神振とりこづづきされ久しさせしろもい神てき 人丸拾雜云 み
づづきい。社記の姫也こうこきい。神代より久しくあ社へ。
枕詞みて久しさいつり。信吉いあ云の神うて。姫もう
信こゆ人まえくしたるのこうこんと也。神しれしい。助字也
ぐ一事いこぐ云ぐうや屋みあべこ紙しいこき人し
ちけまだ 信物 春日さす芳のうこばのうこけて君し
枕もいづまれも枕ん 信人云云 仏数のし也 皆助字也
蘊堅月次よ 神祇
月にみこあ神のんもはけそ人よちこあ 麦鴻れこら
ゆのふこあ影神をもあくれと神こ 寄とじよ

仏の誠を尽して。其物の道理を。寄こうこ時い 鹿神
も其中まあうあ。よこ人よ。ちこ彩こ。こ也。これ神
道歌道。一致なれこ也。此比いこた。今比。和寄さうこ。
ろをよくあてよむ所をいこ也
法印清弁老の歌に下行し所名所おこそ
人こ寄後行こよ 祝のんを
言をくいきれ枕系あこそへこ日別こもこ又ぞあいこん
まこ紙くいきこいこひこけこうけこ。ぼこ。ちこ名所も。
枕こ名れもはくこに生の枕系しいこ不あれば。まいさ
しくいきてあこくこ人なこゆへこ日別こもこ又こう
をこてをこんこ也。生。枕系。続家也 例 載こ也 祝 枕
されの枕ここくこ。こはまでこもいさの枕系 中務集 八月日
まこもこ枕系いきこもしこの歌こさこ祝

うふ（為家卿ほか　拾雑賀）　てんぢんはごつくいつくしき後也。一本にはいつくしき同
しかも我のみやゆるてんぢんはうるはしのおのくにそなれも
ゆるさうし（後京極　拾雑賀）　今はしらふかうしさんも神すかうえばかまの森
して門さかりてへ（古雑）　昔よりなれる宿のうつのいしまの
本ふるてあるはるてへ（天暦御製　拾雑冬）　てんもとつくしつくしの詞也

勅撰被載歌仕源之法師坊にて人〻に示侍る

しも来も潜いるまで和元ちのくしのおのしの石の友永
和元のくしの同〻入はるくすむ友毎ないかり来も一所
よかくる潜るれいすはるくすむ友毎ないかり来も一所
るれいかり来りけて同しく同しくしくるくるくる

池水のいしづえ和名云。樋。音威。淮南子云決塘發
樋許慎云。樋所以通陂竇也。和名。以比。二人九秘云。
堤乃水口也。樋ともいふ。民間いつゝの樋の事也。萬海類
篇云。樋決塘器也 ふるゐの苗代水い引わたす
ふるの池ノいしづえ 後人家和名抄云 ふるゐの苗代
池はたみゝれいしづえ 拾遺上 万代
しもしへさ新 例 ふるゐなき池乃続く万代をすむ
べき新乃ちゝくえゝくゝ 新古今 詞ゝあいしづいづゝ
ゞし。万ゝ業も。ゝもしへゝ月乃新池水ゝゝはりて
えんゆゝ也。池乃いしづえを云方いゝ者ゝしゝ
ゐゐゝゝ家ゐゝ
ひさゝ神やちゝせゝ日ゐゝん者乃ゝゝゝゝゝ者を
者乃威徳ゝて杉ゝゝ杉ゝ澄ゝ者ゝ秋い。

ひさゝ乃ゝゝ者ゝ者ゝ者